

1 卷の一

秋水泡語

卷の一

一九九七年

「詩法のために・3」 レーモン・クノー

置き場所がよく 選び方もよければ

いくつかの言葉で詩ができる

一篇の詩をかくためには

言葉を愛してやればいいのさ

自分が何を言いたいのかわからなくても

詩がうまれることはある

あとからテーマを捜し出して

その詩に題をつけてやるんだ

でも 時によると 詩を書きとめながら

泣いたり笑ったりすることもある

なんせ激しいもんだからね

詩ってもんは

レーモン・クノーという人が、『運命の一瞬』という本でこう言っているそうだ。しかし、うかうかとのせられて言葉を連ねても、必ずしも運命の一瞬に出会えるわけではない。あまりに忙しく過ぎて、わたしの身心の言葉が枯れようとしているのではないか。そのような日々の送り方こそ、うかうかできないことなのではないのだろうか。

一月八日

松の内明けて雷神初仕事

遠山が雪化粧して立つ屏風

一月十七日

一人の不運な男が泣いているとしたら、それは人間一般の不明を背負わされているのだ。しかし絶望などと甘い考えを持ったら、魯迅に言われるだろう、まだまだだと。人間の身を引き受けたからには、もつとも深いところでそれを担うことだ。

一月十八日

受験生それぞれの顔で戦う日

寒日和BSアンテナ日に向かう

一月十九日

NHKのクイズ番組を見て、「井の中の蛙大海を知らず」という言葉には、「夏虫氷を知らず」という対になる句があることを知る。

『莊子』秋水編、

井蛙、以て海を語るべからざるものは、虚に拘めばなり。

夏虫、以て氷を語るべからざるものは、時に篤ければなり。

空間に言及したからには時間も考えにのぼるべきものだ。時空概念の希薄な日本人の一人としてうかつだったのだ。わたしの経験した空間は狭く時間は短い。その狭い虚にならずみすぎ、短い時だけに篤すぎたのではないか。

知慧も無く冬の時代の夏の虫

一月二十日

木瓜一つ冬の時代に咲き出でる

佛無しと思つて祈る愚禿の身

一月二十一日

意にそまぬ職を捨て得て去る人を見送つて聞く冬の風音

M: ビュートルという人が次のように言っているそうだ。

∴ 詩というものは、人がその意味内容を把握するよりも前から、ほかのテキストとは違ったものとして立ち現れてくる一つのテキストである。∴

一月二十二日

「雪中七句」

大灯笼雪を着込んで並び立つ

枝振りを雪の白さで描く柿

水鳥が作る波紋に溶ける雪

白雪を乱舞に誘う風車

菜の花の方形陣や雪の原

雪の山背負い家々微動せず

朝日射し画す雪山目指す道

「いま書かれる一つの短歌、一つの俳句は、それ以前に書かれたすべての短歌、すべての俳句を、ことごとく踏まえて作られる…」

—— 『フランス詩の散歩道』

一月二十三日

霜の野の草の緑のやわらかさ

石柱で鳩睦みあう霜の朝（石柱の銘は、「不染世間法如蓮華在水」）

道義地に落つ水行神通ほをほらませよふゆの海

一月二十八日

多事多難有象無象の見える空

二月四日

管弦に春を尋ねる春立つ日

鳴り響く悲哀の曲に身をゆだね歌すくい取れ静かに弾む

二月六日

春隔だつ煙霧の中で踊る人

二月十六日

春待たず道に斃れる雀あり

7 卷の一

細道の奥に春待つ霊柩車

菜の花を尋ねあぐねる野北の野

春寒の能古を「こをろ」と潮巡る

伊弉諾の天の鳥船帆を広げ小戸より出でて潮路を目指す

二月二十一日
長征せよ早春の月照らす道 非力なり戦のことは比喩とする

梅を襟に天の子午線尋ね行け

二月二十四日
霜の道犬かき抱き行く男

三月八日
日溜まりを探し椿を愛でる犬

三月九日
高原の春の土産は大アサリ

三月十日
春眠をやぶる地の鶏旅の宿

春風が湯煙流す湯布の下

人形の面々動く緋毛氈

(日田市豆田町、草野屋の人形達)
経世家広瀬氏の家訓の一つ、「義欲の事」。

三月十一日
世はかくあり、花と三日月仰ぎ見る (我が家のサクランボの花)

三月十三日
春雨がやんでしじまに明けの鐘

三月十五日
清浄を放射して立つ辛夷の樹

三月十六日
忘却の上に忘却積み重ねゼロの地層を作り為す母

三月十七日
我もまたゼロの地層を作る者人は無魂の事として在る

三月二十一日
わが犬を無視して通る春の猫

三月二十三日
山桜写し静まりかえる池

三月二十四日
古バイク菜の花と立つ都市の川

金屑川肩を寄せ合う夫婦鴨

咲く花に浮橋かけて月の使者

三月二十八日
人はいかにあれ、花のかすみを食って在れ

三月二十九日
手のひらに山吹の花散る朝

三月三十日
桜咲く塚から蝶の巫女出づる

彗星が四千年の春を経て夜空にわたす夢の浮橋

四月四日

三毛猫が雨避けて行く花の下

つばくろは花遠く見て高み飛ぶ

四月七日

その口でその身心と縁遠い言葉を並べ式辞読む人

美辞麗句言いかねる身や散る桜

四月八日

風誘う風車立つ蓮華畑

四月九日

底無しに眠い、多難の春なのに

四月十日

春風に鳶凧と化す浜の空

身の内が銀波と揺れる春の暮れ

四月十一日

リュウグウノツカイは衣冠厳かに特命帯びてわが前に在り

四月二十三日

つばくろが停止、青葉の上の空

おぼろ月藤と世界を薄く染めなにがしかほど世を掬いとれ

四月二十七日

町内の寄り合い蝶も出る日和

四月二十九日

じやれる犬供に庭掃く四月尽

五月一日

青葉湧き生まれ出たる守宮の子

五月四日

大鯉を呑み込み川を行く幟

五月二十二日

じゃがいもの花身近なる身を離れ

蝶の夢覚めて持久の日々続く

「〈意味〉とは、記号の実現が記号の布置として成立したとき、その記号の布置の

かたちと不可分な配置として起こる世界と私たちとの関係づけなのです。…〈主体〉とは、記号の現動化において実現する「いま・ここ・わたし」の布置により生み出される効果である」……『知の論理』

五月二十四日 ツバメの子親待つ軒の外は雨

五月二十八日 行く時の今を支えるものは何？ 麦秋に満つ音に聞き入る

五月三十日 闇照らす灯に卯の花の立ち出でる

田植え機が闇夜の水の上動く

大海を前に蛙の鳴く時節

濃密な五月の闇にからめとる共同体の場に立ち帰る

六月四日 水入れる田に現れる土地の紋

六月七日
岩窟に触手見事なカマドウマ

六月八日
厠上にあじさい、記事は世の腐敗

六月十日
しくじりに梅雨空仰ぐ有漏の身や
ただありうべき紫陽花の色

六月二十日
梅雨晴れや蜘蛛は己を高みまで

六月二十四日
わたしが考えたり言ったりすることは、とりとめもないと言うべきかもしれない。密かに徐山亭と号し、谷川の秋水と戯れにパソコンの使用者名に最近入れて、徐山亭秋水ということになるのだが、この断章はさしずめ谷川の秋の水に浮かんで消える泡のようなものである。

六月二十五日
ザリガニを手にはこらしく笑う子よ

六月二十八日
アジサイに倦むこともなく降り注ぐ雨に見入れば音の広がり

七月二日

わが山に虹の浮橋かけ渡しいざなう空を今歩むべし

七月七日

願い書く笹立つ夕べ人の為す不正に出会い雨の空見る

火星から届く映像見据えれば生をむさぼる身に畏れ抱く

七月八日

藤棚に再生の花、梅雨行かず

七月九日

天の底抜けて大雨、杞の国に

(憂うべきこと多い国に)

ひたすらに只人の道、水中行

七月十六日

ヴァカンスへ成田エクスプレスの床の上

七月十七日

市庁舎のからくり時計十二使徒出でて迎える夏の花嫁

そのかみは刑場の橋土産買う

時移りプラハの城に夏猛し

七月十八日

凶弾も大ハンターのコレクション
歴史を変えた銃声遠く

七月十九日

モラビアの麦に試練の夏の雨

七月二十一日

黄金のさざなみ夏の夜の夢

夏の夜の光に浮かぶ王宮をワルツに乗って行く船で見る

七月二十二日

マジヤールのひまわりの海およぐ蝶

旅人を迎える古都は虹かける

ウィーンの大世紀末風車立つ

七月二十五日

残月のそばへ燕は昇り行く

昔日の飛行機雲を見る夫婦

ポトメドウに草食む馬や夏の風

七月二十八日

長旅の果ての耳鳴りセミの声

八月九日

同窓の個性それぞれ甦る三十年の時巻き戻し

(同窓会)

八月十三日

盆の花肩に老婦の行く峠

イヌビワの汁つけ潮の香り嗅ぐ

丈低き桔梗海辺の崖の上

八月十六日

旅にあけ記憶も成さず盆の月

(太陰暦七月十五日)

八月十七日

「東城の夏老いと欲す」
取り返し得ぬ日々の記憶が
自信なげに 少しでも
どうして 全部の記憶でないのか

振り返れば未熟だったが
しかしまだ 情熱のあつた頃
どうして 欲したことを成し遂げる勇気が無かったのか

日々潰え去る法則の中でも
鮮明な記憶となるべきことを創り出す力を
今どのように 湧きたたせればよいのか

盆休み最後の午後に真剣な電話を受けて目を覚まされる
夏の月満ちて老いへの木偶おどり

「ほんとうに黙することのできる者だけが、
ほんとうに語ることができる。」 …キエルケゴール

八月十八日

雨多い夏や川面をなすび行く

八月二十二日

熊蟬の讃歌に今も力あり

南山になぜ嘯かぬ蟬と在れ

踊りの輪まわす歌声風にのる

「抒情詩的なものはしごく当然のことながら自己の外部にいかなる目的を
ももっていない」とキエルケゴールは言う。

八月二十三日

点ほどの虫に翅あり風を遣る

八月二十四日

コスモスの花まだ咲かぬ林の中を

小さな小さな蝶二つ

八月二十八日

輪唱するつくつく法師幾人か

八月二十九日

路地抜けて退場し行く夏の花

腹痛に月下美人の下で泣く

九月九日

秋風に身を躍らせて触れる鯢

九月十日

菊生けて二胡独奏に耳すます

九月十一日

草分けの白猫稗の伸びた田へ

年重ね苦瓜の味好ましき

九月十三日

「翼ある来訪者」

蜻蛉よ

無生の水境から来た使者よ

わたしの母の涙をその泉に運んでくれ
老いるということの悲しみに耐えられるように、

蜻蛉よ

無思量の空へ身を翻す使者よ

わたしに涙の水をその泉から運んでくれ
老いるということの真実が見えるように。

九月十四日

翅乱し死ぬ蟪蛄の伸びた鎌

九月十七日

生生に満月愛でて虫は鳴く

九月十八日

黒揚羽我と出で立つときめいて

九月二十三日

故郷の空で夕焼け追う機中

九月二十四日

鉛直な窓に真横にはらばってヤモリは秋の夜の都市見る

十月七日

月下美人初めて見たと母は言う秋の良夜の馥郁たる美

白萩の花乱れ散る夜の闇

十月八日

澄みわたる山際、久遠の秋の暮れ

十月九日

捨ておいた秋草にまた花が咲く

十月十日

肺気腫で車椅子からコスモスの園を見つめる人の背静か

コスモスの中に人あり須臾の想

十月十六日

月冴えて今日の花野を見ぬまなこ

十月十七日

明星が灯る無上の秋の空

十月十八日

霧こめる花野に花を手折る人

まだ残る垣の朝顔淡き青

十月二十一日

百舌鳴いてあくまで高い朝の空

澄む水の中にたわわに実る柿

秋の野の草生けて聴く天の声

十月二十三日

秋曇り孤鳥は向かう海の道

行人の姿小さく見る高み

十月二十七日

白い羽鳥合の中のかちがらす

秋の夜の公衆電話に相撲取り

十月三十一日

檀家へ行く女法師に櫂散る

十一月二日

「南山に秋を尋ねて七句」

棟の上柿赤赤と山の里

黄葉に小さきアカネ端坐する

野苺を探し花野に迷い入る

むかご取る林に届く水の音

石露の花写す流紋岩越える

木漏れ陽に意匠が光る蜘蛛の網

烏瓜かかげる杉の上の空

十一月三日

城茶会幕舎に男子ただ一人

秋日和朱傘の下の湯気立つ茶

十一月八日

秋月の城址真昼の月かかる

黒門に紅葉照り添う日本晴れ

行者杉五百年間行じおり

十一月十日

杜鵑草落ちて焚き火の煙立つ

十一月十九日

すると何かい、

われわれの同類である葉緑体というやつを持った連中が、太古、何億年もかけて炭酸ガスを炭素と酸素に分けたその素材の低エントロピー性とエネルギー含有性の恩恵を受けて人間という存在があるってことかい。

その炭素を消費して炭酸ガスに戻すという人間様の活動

——たしかに生きるよろこびであるもの——が
地表にオーバーコートを着せて、
生きもの全体を生きにくくするってことかい。

とんでもないことだ！

しかし、

摂理だねー。

十一月二十九日 冬迫る山の紅葉に余命あり

十二月三日 木枯らしの流す雲切る月の剣

十二月八日 華やかさ離れ絵を描く師走の夜

十二月二十二日 玄い道亀の歩みで越す冬至

十二月二十三日 想念は峠の先の海抱くふる里にあり母の暮れの日

十二月二十七日 老棟梁大根積んだ軽トラで師走の町へゆったり帰る

十二月二十九日 風流も措いて年遣る凡夫の身

十二月三十日 冬風を睨み居並ぶ鳶の口

十二月三十一日 大鷲が行く年送り立つ洲崎

一九九八年 正月
徐山亭 謹製



「港」 『パリの憂鬱』

シャルル・ボードレール

港は人生のたたかいに疲れた魂にとつて魅惑的な場所である。空のひろがり、雲という動く建築、たえず変化する海の色彩、灯台のきらめき、そういったものが、飽かせずに目を楽しませる絶好のプリズムとなる。複雑な艤装をこらした、すらりとした船の形、その船に波が調和のとれた振動を伝えているのが、魂の中にリズムと美への好みを養うのに役立つ。それから、とくに、もはや好奇心も野心もなくした者にとつては、一種の神秘的な、貴族的な楽しみでもあるのだ。展望台に寝そべったり防波堤に肘をついたりしたまま、出て行く者と帰って来る者、まだ望みをもつだけの力があり、旅行したり金をもうけたりするだけの欲求がある者たちの、あらゆる動きをじっと眺めていることが。

